＜いじめ防止「きずな」キャンペーンについて（お願い）＞

暮秋の候，保護者の皆様におかれましてはますますご清祥のこととお喜び申し上げます。また，日ごろより本校の教育活動にご理解とご協力を賜り感謝申し上げます。

さて，先日，仙台市教育委員会より，全ての児童生徒が安心・安全に学校生活を過ごすことができるよう，５月に引き続き，１１月にもいじめ防止「きずな」キャンペーンを実施する旨のプリントを配布したところです。

学校においても生徒会を中心に１１月は毎週月曜日に「サンキューグータッチデー」を行い，「大丈夫？」を合い言葉に，両手でグータッチをしてお互いの安心・安全を確認する取組を行っているところです。また，先日は全校集会で全校道徳の授業を行い，「命を大切にすること」について考えたところです。

しかしながら，最近複数の保護者や生徒の方から，いじめにつながると心配される事案について情報提供がありました。具体的にはＬＩＮＥのステータスメッセージなどのＳＮＳを使って，特定の生徒に対して誹謗中傷する内容が記入されているとのことです。もし個人が特定できるもの，さらに第三者もみられる状態にあるものであるとすれば，重大な「いじめ」の事案になります。まずはこの事実を保護者の皆さんに早急にお伝えし，ご理解いただいた上でご協力をお願いしたいと思います。

仙台ではいじめ事案が続き，また先日も東京で，家族旅行を理由に部活を休んだことをＳＮＳで注意したことなどがいじめにつながったと認定された事案があったばかりです。本人がいやがるあだ名で呼んだり，本人の意に反する悪ふざけがあったり，相手の容姿や性格，特性を非難したり，無視をするなど相手の心身を傷つける行為は人格否定につながり，すべて「いじめ」に含まれます。どんな理由であれ，絶対に許されない行為なのです。

いじめられる側にも原因があるというのは認められません。学校でも今回のＳＮＳを使った個人を傷つけるような行為は毅然とした態度で指導していきます。いじめは絶対に許さないという姿勢を保護者の皆さんと協力しながら子どもたちに伝えていき，二度とこのようなことが起こらないようにしていかなければなりません。

今後，いじめの行為さらにはその行為に至った背景などについても聞き取りを行い，生徒の気持ちにより添いながら，指導していきたいと思います。しかし，いじめに至った理由や経緯についてはいじめを正当化することにはならず，別の問題として切り離して指導していかなければなりません。指導の過程で保護者の皆さんにも個別に連絡を差し上げ，ご協力をお願いすることもあるかと思います。

できるだけ早く安心・安全な学校環境を取り戻すため，ご家庭においてお子さんとの話し合いの場を持っていただき，スマホや携帯などの使い方について，さらにはＳＮＳの内容について再度確認をお願いします。緊急を要する事案であることをご理解いただき，早急にご家庭でのご指導ならびに情報収集などのご協力をよろしくお願いいたします。

「命を大切にすること」　　（一部抜粋）

今日は一人の中学生の生き方を紹介します。

「ぼくは星になって，星から星への郵便配達をするんだ」

「星への手紙」という詩集があります。北原君という中学生が書いたものです。

北原君は，小学生のとき，よくつまずいたり，物を落としたりする原因不明の病気になりました。まもなく，筋ジストロフィーと診断され，入院生活を送るようになりました。当時，４５年前は，筋ジストロフィーは２０歳までには死んでしまうという難病でした。

人の力を借りなければ，身の回りの事は自分では何一つ出来なかった北原君は，「こんな自分は世の中の役に立つ事ができない。早く死んでしまった方が楽だ。用便も入浴も助けを借りるような恥ずかしい

思いをしてまで，生きていたくない。生きている価値がない」と絶望のあまり，自殺を決意したのです。中学２年生の時です。

しかし，自分では歩く事も出来ず，鉛筆を持つことも出来ない北原君は，自殺をする事さえ出来ません。それで，彼は，絶食することに決めたのです。一切のものを飲まない。一切のものを食べない。というように。

絶食して三日目，心配をしたお母さんが「心をこめて作ったスープだから飲んで」と口元までスープを持って来ても目をつむって拒否しました。

すると彼の首筋に熱いものが落ちました。お母さんの大粒の涙です。その途端に，ああ，僕はこれ以上お母さんを苦しめることはできないと感じました。そうしたら自然に口が開いたのです。思わず，目を開いてスープを飲みました。

その時です。お母さんが「看護婦さん，この子がスープを飲みました」と大きな声で叫びました。その声を聞きつけて，看護婦さん達が飛んできました。みんな涙を流して「よかった，よかった」と喜びました。このとき，北原君は，「僕が頑張って生きることで，お母さんや看護婦さんがこんなに喜んでくれる」ということを実感しました。

それから北原君は，生きていることに対する姿勢が変わったそうです。

「今にも消えそうな自分の命だから，どんな小さな喜びでも感じたら人に分けてあげよう」と思ったのです。「病室の窓からいい風が入ってくるよ」そんな小さな喜びでも看護師さんに教えてあげることで喜んでもらえる。そういう自分の気持ちを人に伝えたい。そう強く思うようになりました。

「今を限りに」と，まわりに「よろこび」をわけて，精一杯生きていこうとしていたのだと思います。「今」の喜びに全力投球していたのかもしれません。

多くの人はいろいろな事を自分中心に考え自分のほうに引き寄せよう「やってもらおう」「みてもらおう」「いいね！をもらおう」とします。英語でいうと TAKE しようとします。それは誰の中にも潜んでいる自分勝手な考え方です。皆さんにも先生達にも必ずどこかに存在します。そしてその考え方が自分自身を苦しめてしまっていることがあるのです。

しかし，北原君は，死と向き合っているにもかかわらず周りの人に生きている喜びを「分けてあげよう」GIVE しようとしました。GIVE　を優先する人と　TAKE を優先する人についてドイツの学者マックスウェーバーは人間の品格の差だと言っています。

北原君の生き方が，TAKE から GIVE に大きく変わった瞬間に気づいたでしょうか。自ら命を絶つことほど自分勝手なことはありません。多くの人を悲しませてしまいます。意味のない命なんてないのです。お母さんと看護師さんの涙がそれを証明しています。そのことに気づいた北原君の生き方は，生きることが，周りの人を生かし，いかに勇気づけるかを教えてくれています。生きることは，「生かし合う」ことなのだと・・・。